花の渡り鳥

解説

長谷川一夫、市川雷蔵、勝新太郎という、時代劇三大スターの初顔合せが大評判となった股旅ものである。

とにかく人気バツグンの三人が颯爽と登場、ファンにとってはたまらないところだろう。

監督には、股旅もののベテラン田坂勝彦。あの巨匠田坂具隆の弟である。デビュー作となった「剛太郎月夜唄」より、長谷川一夫と組んで一スタイルを確立して来た。「浅間の鷲」「関の弥太ッぺ」などは、よく知られたところである。

また、「父四郎所蔵股旅」「旅は気まぐれ風まかせ」などでは雷蔵と、「森の石松」「東海道の野郎ども」などでは勝と組み、やはり股旅ものにその魅力を引き出している。

そんな田坂の演出だけに、一層、顔合せの妙が効果を生んでいるといえる。

きらに、もう一つこの作品のポイントを挙げるとすれば、やはり共演陣であろうか。

木暮実千代、阿井美千子などの艶麗ぶりも見ものだが、夏目俊二、柳永二郎、香川良介、寺島貢ら芸達者の名サポートも見逃せない。「怪盗と判官」でデビューしたばかりの新星清水谷薫のういういしさもまた、気になるところであった。

◎本商品は保存原版から最良の状態で制作しておりますが、映画公開時より長い年月を経ておりますので一部作品にはお見苦しい場面もございます。あしからずご了承下さい。

山根貞男のお楽しみゼミナール

お待ちかね、美男三羽がらすの初顔合わせ！　恋の花咲き、剣は飛ぶ！

これは「花の渡り鳥」の宣伝惹句で、長谷川一夫・市川雷蔵・勝新太郎の競演がいかに売りものであったかが、ことばの勢いによく出ている。一九五六年一月三日封切りのお正月映画であったから、意気込みも違ったのであろう。

三人そろっての競演は最初だが、市川雷蔵と勝新太郎は一九五四年の「花の白虎隊」で同時にデビューしたあと、これ以前に、それぞれ一本ずつ長谷川一夫と共演している。映画界にはこういうケースがよくあって、この場合、大スター・長谷川一夫といっしょの映画に出すことによって、新人を観客に印象づけようというわけである。他社の例でいえば、石原裕次郎が爆発的に人気のあったとき、日活は、小林旭や赤木圭一郎を彼と共演させ、売り出している。

「花の渡り鳥」では、そんなふうに売り出した市川雷蔵と勝新太郎のイメージをさらに盛り上げるべく、長谷川一夫との三人競演が実現されたのにちがいない。

この当時、長谷川一夫は、出る映画がすべて大当たりするほどの勢いで、いわば大映を背負って立つ人気スターであった。たしかこの映画の翌年には、大映の取締役に選ばれている。

けれども、長谷川一夫の人気が絶頂期にあるということは、スター交替劇のひそかなはじまりではなかったろうか。

一つには、市川雷蔵の台頭ということがある。雷蔵はデビュー後、着実に人気を伸ばして、この前年には溝口健二の「新・平家物語」で器量が飛躍的に大きくなった。作品本数も増え、「花の渡り鳥」の年には、十三本もの映画に出ている。そして、二年後には初の現代劇「炎上」で各賞に輝く。

「花の渡り鳥」の三スター競演は、さまざまなことを思わせる。

■キャスト

佐吉の老爺　長谷川一夫
佐吉　市川雷蔵
朝の半次　勝新太郎
見世物の娘　木暮実千代
おしの　清水谷薫
おみね　阿井美千子
檜の惣吉　夏目俊二
岩井屋善蔵　柳永二郎
素浪の十兵衛　香川良介
お後の其七　寺島貢
雷神の竹　天野一郎
半鐘の梨造　水原洋一
江戸の千鳥　石原須磨美
輝楽の鶴八　上久保雅
辰巳屋の番頭　玉置一恵
浅草の佐　千葉豊四郎
旅宿の亭主　堀北幸夫
八田の常　武田健
岡っ引の女中　高瀬朝子
飯屋の小女　石井富子
おつね　小林加奈枝

■スタッフ

製作●溝井敏
企画●浅井臣三郎
原作●川口松太郎
脚本●犬塚稔
監督●田坂具隆
撮影●牧田行正
録音●大谷巽
音楽●長谷川伸人
美術●上里義三
照明●伊藤貞一
編集●西田重雄

TND9269
昭和31年度作品
80分・モノクロ